



マイ スコープ

上越にマダラチュウヒ出現

上越市 中川直剛

1995年6月4日くもり一時雨 AM9:15 頸城村浮島新田休耕麦畑。5月21日に正善寺ダム奥で探鳥会がありその後浮島へ皆でセッカを見に行きました。その後ササゴイの撮影ポイントを教えてもらったので以降毎日写真撮りに通っていました。6月4日は天気が悪かったため休耕麦畑でセッカやホオアカを見ていたところ9時15分頃に車の後から低空で白い鳥がとび出した。下面が真白で風切が黒い。車内にいたのと突然の出現で頭をよく見ていない。胴体がカモメのように上下動がなく平らに飛ぶのでチョウヒの仲間でオスだと思ったが頭と背を見せない。この鳥は直進するばかりでまたたく間に1km以上も離れてしまう。そこで2回チュウヒがよくやる急反



転をやり、近くにいた小鳥達が一斉に逃げだすのが双眼鏡で見た。もっとよく見てやろうとスコープを用意している間に見失う。チュウヒやハイイロチュウヒは冬鳥で6月に出るわけがなく、残るはマダラチュウヒ。えらいものが出たという感じでした。近くを探したが見つからず。11時頃浮島へ戻ったところ鳥仲間の大原淳一君が来てくれたので識別ポイントを見ることはできなかったが大物が出たよと告げる。11時40分頃400m先の麦畑に出現、旋回して背中 of イカリ形がよく見えた。うまい具合に棒杭にとまったので、彼は車で私は歩いて近寄り写真を撮ることができました。鳥は翌朝7時頃までいたようです。



新潟大学構内の鳥相

新潟市 梅森 慎吾

はじめに

海岸林であるクロマツ林と畑に囲まれた新潟大学は、日本海のすぐそばに位置している。構内は様々な樹木が植栽しており、畑や草原等の色々な環境がある。磯(1984)によると構内に150種もの鳥類が出現している。ただし、どのような鳥類が出現したか資料が残っておらず、しかも11年前と今とでは種数が変化しているかもしれない。そこで、鳥類調査の基礎資料として新潟大学野生動物学教室の学生で鳥類調査を行った。

方 法

週に一回、ラインセンサス法(以後、センサス)を4/27~8/15の間で計16回行った(ただし5/16と7/11の2回のデータが集まっていないため14回分のデータを公表するにとどめる)。構内を一定のコースに従ってゆっくりと歩きながら出現した鳥類について種類や個体数などを記録していった。

結 果

出現した鳥類はセンサス中に51種類、センサス以外で記録されたものも合わせると75種類になった。月別の鳥類リストを表1に



大学構内で営巣したトビのヒナ

記しておく。

渡りの時期から繁殖期を通じて出現したのは表1からもわかるようにカッコウ、コゲラ、ハクセキレイなど20種類であった。そのうち巣を見つけ、繁殖が確認されたのはトビ、キジ、キジバト、モズ、シジュウカラ、スズメ、ムクドリの7種である。チゴモズは巣立



大学構内で保護されたフクロウ

ち雛に給餌しているのを確認したが巣は発見できなかった。

図1に出現鳥類の個体数合計の変化を図2には鳥類の種数の変化を図3には最も出現頻度が高かったムクドリの個体数変化を記した。図1において4/27の個体数が大変多いのはヒヨドリの渡り(個体数511+)のためである。他にはあまり個体数の変動に傾向は見られない。図1・2を比較して種数がピークの時に個体数が増加してはいなかった。図3のように個体数の増減が激しいのは幼鳥が移動しているためである。このように個体数が不安定なのは他の種にも多く見られた。

まとめ

今回の調査では出現した鳥類の種類が東京や神奈川周辺とあまりにも違って驚い

表1, 1995年月別鳥類リスト

1995年 種名	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	種名	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月
1,ゴイサキ						39,ノビタキ	-----				
2,ダイサキ						40,トラツクミ	-----				
3,アオサキ						41,クロツクミ					
4,トビ						42,アカハラ					
5,ハヤブサ	-----					43,ツクミ					
6,チョウゲンボウ						44,ヤブサメ		-----			
7,キジ						45,ウグイス					
8,ヤマシキ						46,メボソムシクイ					
9,オオシシキ	-----					47,エソムシクイ					
10,コアシサシ						48,センダイムシクイ					
11,キジハト						49,キクイタタキ					
12,カウカウ	-----					50,キビタキ	-----				
13,ツツトリ		-----				51,オオルリ	-----				
14,ホトキス	-----					52,コサメビタキ					
15,オオコノハスク		-----				53,エナカ	-----				
16,アオハスク		-----				54,ヒカラ	-----				
17,フクロウ	-----					55,ヤマカラ	-----				
18,ヨタカ	-----					56,シジュウカラ					
19,アマツハメ		-----				57,メジロ					
20,ヤブカシラ	-----					58,ホオシロ					
21,アリスイ	-----					59,カシラダカ	-----				
22,アケラ	-----					60,ノジコ					
23,アカケラ						61,アオシ					
24,コケラ						62,カラヒワ					
25,ヒハリ						63,マヒワ	-----				
26,ツハメ						64,ウソ	-----				
27,イワツハメ			-----			65,イカル					
28,ハクセキレイ						66,シメ	-----				
29,ヒンスイ	-----					67,スズメ					
30,サンショウクイ						68,コムクドリ					
31,ヒヨドリ						69,ムクドリ					
32,チゴモス						70,カケス					
33,モス						71,オナカ	-----				
34,アカモス						72,ハシホソカラス					
35,コマドリ		-----				73,ハシブトカラス					
36,コルリ											
37,ルリビタキ	-----										
38,シヨウビタキ											

* ----- センサス中に観察された鳥類。 ----- センサス以外で観察された鳥類。

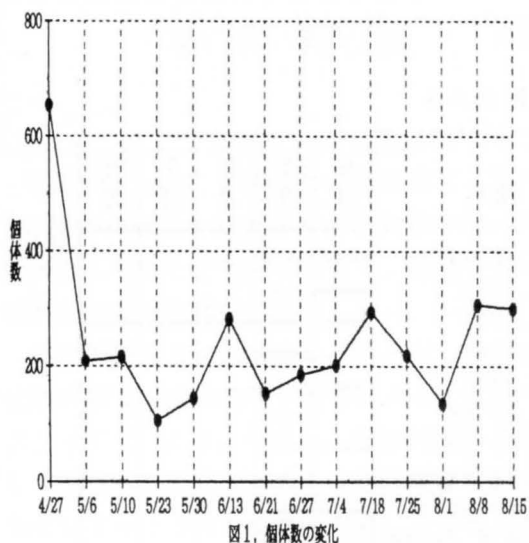


図1, 個体数の変化

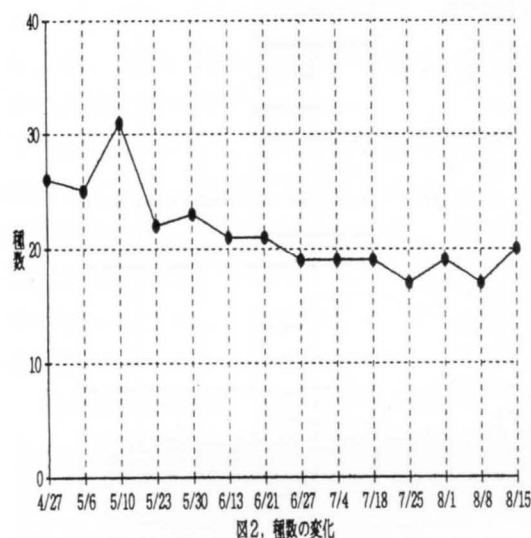


図2, 種数の変化

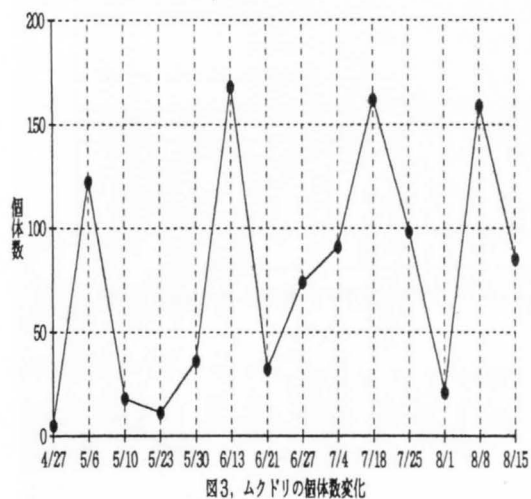


図3, ムクドリの個体数変化

た。まず、繁殖期に関東地方でよく出現するウグイス、メジロ、ヤマガラ、エナガがいなくなり、クログミ、チゴモズやコムクドリがいる。しかも海岸林ではあまり見られない山の方の鳥である。冬期にはビンズイ、ヒガラ、キクイタダキが多く見られ、4・5月の渡りのシーズンには冬鳥であるシメ、マヒワなどと夏鳥であるコマドリ、メボソムシクイ、オオルリなどが同時に同じ場所でぐぜっているなどとは今まで経験したことがなかった。さらに繁殖の時期が遅いように思われる。モズが特に顕著で4月の中旬に入ってもまだ抱卵していた。シジュウカラも巣立ちが1・2週間ずれていた。

大学付近は渡り鳥の通過場所のようなので、今後もセンサスを行い年間を通じてのデータを報告していきたいと思います。

参考文献

- 磯 孝行：1984、野鳥の会新潟県支部報
- 松田道生：1985、野鳥の調査
- 由井正敏：1977、野鳥の数の調べ方



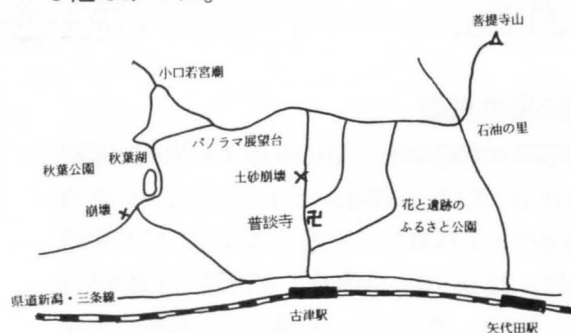
大学構内で保護されたオオコノハズク

秋葉山 木もれ陽の遊歩道を歩く - 8月豪雨崩壊を知らずに -

新津市 渡辺 範雄

最近公園化した秋葉山にはめったに行くことがなくなった。8月4日思い立ってザックに水筒・双眼鏡など入れ家を出たのは1時頃だった。公園緑地室発行の遊歩道パンフをポケットに入れた。新遊歩道は3年をかけ約6億円の投資をして、今年6月4日にオープンしたことは後日新聞切抜きで知った。1つのルート、パノラマ展望台から小口若宮廟を経て熊沢公園登り口に至る道は5月28日に歩いている。案内表示が未設だったこと、起伏が多く歩き甲斐のあることは覚えている。公園入口から車道を登りボタン園のある市の無料休憩所についた。道路に「土砂崩壊 通行止」と柵があった。秋葉湖周辺道路から山手に切通しがある。左山側の擁壁が基礎から見事にくだけて倒れ道を塞いでいた。長さ40m程ブロックの山を踏んで抜けた。随分雨の多い年もあったのに、とうとう崩れてしまったのかと思う。秋葉湖は泥水を満々と貯えていた。湖水右側の道を熊沢公園に向かった。長雨のあとか人の踏みつけた草跡はなく、杉木立の回りは昏い。やがてゴルフ場を右にして階段を降り又上ると展望台に至る。下を見ると新設の焼却場に通じる道路が工事中で、2年前とは大きく姿を変えて広場となっていた。急な階段を下りてみたがどこにも案内板は出ていない。作業中のトラックが2台いたが、凡その見当をつけ道を探すと斜面の下に道があった。T字路に「幹線ルート、左石油の里」と表示がありホッとした。2時50分、家を出てから2時間近い。谷間のスキ原の道を急ぐと、これより遊歩道という表示をみつけた。杉林の暗い道に入る。いくつかのポンピング中の石油槽が立っていた。道の中央は流水でえぐられ輸送管が埋めてあるのが見えた。往時産油当時の繁栄した頃が偲ばれた。道は上り坂となった。遊歩道新設の

功罪は何かと思い乍ら進んだ。やがて石油の里へ4.2km、普談寺へ1.7km25分という案内板を見た。道は狭く昏い、少々疲れて来たので朝日の寺へ至る道を選ぶことにした。道は下るだけだった。大きな砂利道に出左右は葦原、水面が見え出した。ところが砂防ダムの取付点右側の山腹が崩れ道を塞いでいた。戻るには遠すぎると崩壊場所に入ると倒木あり、粘土質の泥土で水溜まりも見えた。木に捕まり乍ら足を運ぶと滑って泥に埋まる。10m位とみて無理にここを越え砂利道に出た。「通行止」と小さく柵が出ていた。遊歩道を歩く者には公園敷地に何の表示もしてはくれない。泥まみれの足許を見つめて苦笑する他なかった。



大森硝子工場の前をすぎると民家が見えた。玄関口に水道栓のある家で水道をお借りしてズボン、靴の泥を落としお礼を言って普談寺へ急いだ。お寺に詣でたが水飲場がなかった。古津駅に着いたのは4時20分だった。豪雨の後で天気がよいからと遊歩道を歩くタイミングがよくなかったのか、土砂崩壊の場所にぶつかってみて公園管理、道路保守のあり方をつくづく考えさせられた半日だった。遊歩道が多く設けられることで、人の徘徊が増えて山の鳥も驚いて暫くは安住の場所を失うのではないかと語る人の話もある。歩いて見ている物思いにふけた遊歩道であった。

新潟・小樽航路探鳥記

新潟市 千葉 晃

はじめに

海岸から沖合いの鳥を観察したり、厳冬期の浜回りで漂着死鳥を集めたりしながら日本海沿岸の海鳥類について見聞を広めてきたが、いつの日か船上から長時間海鳥を眺めてみたいものと乗船の機会をうかがっていた。幸い1984年の夏、宮越一俊氏から耳寄りのお話があったので、お誘いを受けて新潟・小樽航路沿いの海上を探索する事ができた。古い話で恐縮するが、フィールドノートを整理し、観察結果の概要をここに記しておく。往路の調査に同行頂いた宮越一俊氏に厚く御礼申し上げる。

結果の概要

新潟・小樽航路（新日本海フェリー）就航のはまなす（9800t）およびしらゆり（9093t）を利用して往路（7月21日13:30新潟発、22日10:小樽着）と復路（7月24日13:30発、25日10:30着）に2海域、すなわち本州中部および北海道南部の日本海沿岸をそれぞれ2回探索することができた（図1、表1）。この調査で観察した鳥類は表1に示した15種（陸鳥2種を含む）で、個体数が多く出現頻度の高いものはオオミズナギドリ、アカエリヒレアシシギおよびウミネコの3種であった。これらは両海域に共通して認められたが、ウミウ、トウゾクカモメ、オオセグロカモメ、ウトウなどは道南海域に限り出現した。一方、コアジサシは本州中部海域だけで観察され、それぞれ繁殖期の分布の特徴をよく反映していた。海鳥類の出現種数ならびに1時間当たりの個体数は本州中部海域より道南海域の方が多く、海鳥相は北の海の方が



図1. 調査海域を示す略図

やや豊かであるとの印象を受けた。オオミズナギドリの個体数を2つの海域で午前と午後に分けて比べた結果、両海域共午後に個体数が増える傾向がみられ、道南のE海域（神威岬-積丹岬沖）では午前と午後の出現数にかなり大きな差異が認められた（図2）。ウミネコについても同様な比較を試みたが、オオミズナギドリのような傾向は認められず、個体数や出現回数はむしろ島嶼や港の存在と関係がありそうで、これらに近い海域で多くなることがわかった。観察されたアカエリヒレアシシギは南下群と思われ、平穏で波のない

表1. 新潟・小樽航路（日本海沿岸）で観察された鳥類の個体数と出現頻度

調査月日	1984 July 21	July 25	July 22	July 24	
調査時刻	(13:30-19:00)	(4:15-10:15)	(4:10-10:24)	(13:30-19:00)	
調査時間	5.5hr	6.0hr	5.2hr	5.5hr	
天候	快晴	快晴	曇り	曇り時々小雨	
鳥種名	調査海域	新潟～本荘沖	左に同じ	稲穂岬～小樽沖	左に同じ
オオミズナギドリ	176/46 (31.3)	72/45 (12.0)	16/7 (3.1)	249/56 (45.3)	
ウミツバメ類 (種不明)			1/1 (0.2)		
ウミウ			50/16 (9.6)	11/4 (2.0)	
カモ類 (種不明)			1/1 (0.2)		
キアシシギ		1/1 (0.2)			
アカエリヒレアシシギ	55/6 (10.0)	38/3 (6.3)	33/7 (6.3)	10/4 (1.8)	
オオトウゾクカモメ?			1/1 (0.2)		
トウゾクカモメ			1/1 (0.2)	2/1 (0.4)	
オオセグロカモメ			4/4 (0.8)	12/7 (2.2)	
ウミネコ	32/26 (5.8)	79/22 (13.2)	55/43 (10.6)	181/117 (32.9)	
コアシサシ	21/7 (3.8)	16/2 (2.7)			
ウトウ				61/8 (11.1)	
ウミスズメ類 (種不明)			4/4 (0.8)		
キジバト			1/1 (0.2)		
アマツバメ				2/2 (0.4)	
出現種数	4種	5種	11種	8種	
個体数/出現回数	285/85 (50.9)	206/73 (34.3)	167/86 (32.1)	528/199 (96.0)	

注：() 内の数字は個体数/時

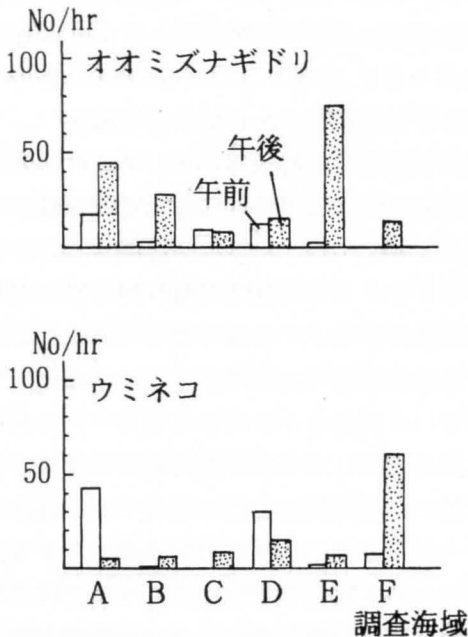


図2. 調査海域と海鳥2種の出現数比較

ゴミの集まっている海面では出現頻度が増加した。しかし、接近して観察できなかったため、羽衣の状態など詳細を知ることはできなかった。



図3. 海上を飛翔するオオセグロカモメ

1994年秋期 新潟県内のワシタカ類の渡り

柏崎市 末崎 朗

1. はじめに

1年遅れとなりましたが、昨年のワシタカ類の渡りについて多くの方々からデータを頂いたため、その結果考えられることを報告したいと思います。頂いたデータは、15地点から延べ103例に達しました。

2. 結 果

表-1に各観察地点における個体数を示しました。観察例数が'93年の72例から103例と増えたためか、総個体数も3,643羽から4,118羽と増えました。渡りの時期の傾向としては、前年と同様でサシバ、ハチクマが9月中旬から9月下旬、ハイタカ、ツミなどの小型タカ類は9月下旬から10月中旬、ノスリは10月中旬から11月上旬が渡りのピークでした。渡りの時間は昨年同様午前中に多くみられました。これは午後の観察があまりないためですが、実際観察者に聞くと、午後になると渡りが見られなくなって観察をやめているのが実状のようです。従ってワシタカ類の渡りは、午前中の方が多く見られると考えてもよさそうです。

表-1 観察場所と個体数

	サシバ	ハチクマ	ハイタカ	ノスリ	その他	計
中条町備前山(6)	68	184	292	207	45	796
柳尾市桑探峠(1)	31	17	1	0	0	49
長岡市南蛮山(1)	54	41	0	0	8	103
山古志村金倉山(1)	6	2	1	0	1	10
小千谷市山本山(15)	595	433	126	22	58	1234
川西町白倉峠(5)	70	27	0	0	0	97
長岡市信濃川西(1)	0	0	0	71	0	71
小出町駒見山(38)	84	53	127	97	35	396
池町角田山(1)	6	20	0	0	1	27
三島町小木ノ城(2)	22	8	1	0	1	32
刈羽村大塚(1)	15	0	0	0	0	15
柏崎市小村峠(2)	12	5	0	0	4	21
吉川町桜坂峠(1)	3	1	6	2	0	12
大潟町朝日池(1)	0	80	0	0	0	80
牧村牧峠(27)	436	480	87	45	127	1175
計	1402	1351	641	444	280	4118

3. 考 察

1994年のデータの中には比較的近い所で同じ日、同じ時刻の観察によるものがあるため検討してみたいと思います。

まず長岡市南蛮山と小千谷市山本山は直線距離にして約15kmしか離れておらず、昨年の観察でもかなりの数の渡りが見られたのでこの2地点の結びつきはかなり強いと予測されました。しかし9月18日のデータはある意味で私の予測を裏切りました。私は山本山に飛んでくるタカ類は、ほとんど南蛮山方面からくるのだろうと考えていたのですが、その日の2地点の観察個体数にはかなり開きがありました(表-2参照)。実際山本山で観察していると東側から飛んできていると思われる個体もかなりいました。この日のデータからだけでは言い切れませんが、山本山は南蛮山方面からだけではなく、より東側の広神村や守門村方面からもタカ類が渡ってくるのが予想されます。山本山はいくつかの渡りのルートの合流点なのかも知れません。

次に9月23日には山本山と、そこから南西に約14km離れた川西町白倉峠での観察がありました(表-3)。山本山で観察しているとほとんどのタカが川西町方面へ飛んでいくように見えたので、この日のようにあまりに差がある結果は意外でした。さらに白倉峠で観察していた黒島さんによるとサシバやハチクマは私が予測していた津南方面だけでなくより西側の刈羽黒姫山方面に飛んでいく個体も多かったそうです。山本山を通過したタカたちはコースを変えて予想とは違った方向に曲がるか、広く分散してしまうのか疑問が残る観察結果となりました。

この他に今年は大潟町朝日池でハチクマ80

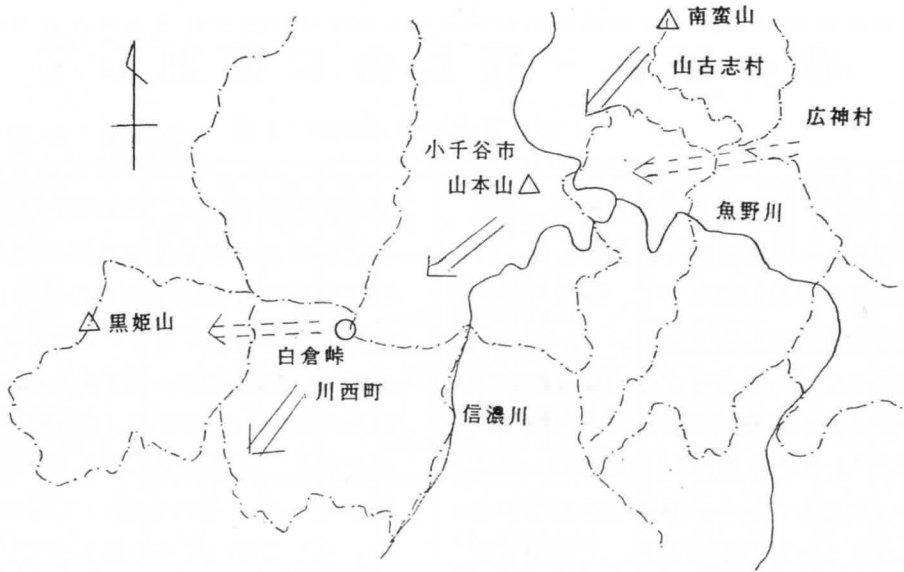


図-1 小千谷市山本山周辺の位置図

表-2 '94.9.18南蛮山と山本山の観察例

	南蛮山	山本山
サシバ	54	191
ハチクマ	41	53
大型s.p.	8	4
オオタカ	0	1
ハイタカ	0	18
ツミ	0	2
チゴハヤブサ	0	1

表-3 '94.9.23山本山と白倉峠の観察例

	山本山	白倉峠
サシバ	175	14
ハチクマ	185	22
大型s.p.	6	0
ハイタカ	26	0
ミサゴ	1	0
イヌワシ	1	0

羽の渡りが観察されたり、小出町駒見山で柳瀬さんの38回に及ぶ観察により駒見山も山本山ほど多くはないもののワシタカの渡りのルートとして考えられることが明らかになりました。これらのことからどんなことが言えるでしょうか。私が昨年の支部報で予想したのは、県内のワシタカの渡りのルートが主に2本あり、少数の渡りが見られた地点は何らかの理由で偶発的に渡りが観察されたにすぎないということでした。しかし1994年のこの結果を考え合わせてみるとその予想も修正しなければならないようです。ワシタカ類の渡りは例えてみれば川の流れのようなもので、いくつかの支流が集まって徐々に流れが太くなっていくものなのかもしれません。しかもその流れは、直線的ではなく、曲がったりあるいは分散したりと複雑なようです。昨年より多くのデータを頂いてかえって謎が深まってしまったようですが、1995年もワシタカ類の渡りのデータを募集したいと思います。さらなる観察によって一つでも謎が解き明かされればと思います。

4. おわりに

今回も早くデータを提供して下さった次のみなさまに深く感謝して今回の報告を終えたいと思います。

石井哲夫、大原淳一、桑原哲哉、黒島善助、立野正信、長岡野鳥の会、中川直剛、中山正則、長谷川誠、古川弘、柳瀬昭彦、渡辺央 (敬称略)

春の総会・探鳥会に参加して

三条市 太田弘美

6月17・18日、妙高少年自然の家で、平成7年度春の総会・探鳥会が行われました。昨年入会したばかりの私にとって、野鳥の会の活動を知る有意義なものでした。

私が野鳥の会に入るきっかけとなったのは仕事の研修で絵本作家村上康成さんと出会いスライドで“ようこそ森へ”（福武書店）を話して下さったことでした。身近にありながらのぞいてみようとしなかった森。その美しさとすがすがしさ、その中から聞こえてくるジュエッ、グエッというカケスの声。その時から、森、自然、鳥への興味が深まり、野鳥の会に入会したのです。

今回、鳥について知りたいと思い気軽に参加させてもらった総会ですが、たくさんの人達が野鳥に親しみ守っていきこうと、事業を計画したり、調査や保護をしたり、会員に情報を提供したりと、一生懸命やっております頭が下がる思いでした。

夜の研修講演は、日報のひげ先生こと、野

柴木洋先生でした。先生の動物と関わってきた話をスライドをまじえてお聞きしました。私は写真のことがよくわからないのですが、先生の写真はとても近くで撮っているのだそうです。懇親会で、なぜそんなに動物に近寄れるのか尋ねたところ、自分から探しに行くのではなく、場所を選んだら2hでも3hでも動物がやってくるのを座って待つのだそうです。そして慣れてから撮るので、そんなに何百倍ものレンズでなくても大きく撮れるのだそうです。私達はどんどん便利なもので簡単に物事をこなすことに慣れてしまい、じっくりと向き合うことを忘れてきているのかもしれない。それに、ものがありふれている時代だけに、物、人、生き物を大切にする心が足りないようにも思いました。先生のようにめいっぱい自然や生き物に愛情を注ぎ、のんびりと日々過ごしていきたいものです。

翌朝4:00に出発し、探鳥地の笹ヶ峰へと向かいました。山道をどんどん進むにつれ、



眠気が吹っ飛ぶような美しい景色が広がってきました。遠くで朝日がのぼり、やわらかい緑が溢れ、花も咲いています。木々の間から聞こえる野鳥のさえずり。心がうきうきしてきました。探鳥会は3グループに分かれて行動しました。鳴き方、飛び方で鳥の名前がわかるベテランの方に驚き、必死に耳を傾けました。フィールドスコープを覗かせてもらい初めてじっくりと見たビンズイやオオルリなど。小さな体で大きな口を開け、精一杯さえずっている姿はとても愛らしく、いくら見ても飽きませんでした。これからもかわいい鳥たちの姿を見続けるために、自然を大切にしたいと愛情の心を持ち続けていきたいと思えます。

今回の総会、探鳥会を企画し進めて下さった役員の皆様、大変ありがとうございました。

今回の探鳥会で観察された鳥

アオサギ	センダイムシクイ
カルガモ	キクイタダキ
ノスリ	キビタキ
キジバト	オオルリ
ジュウイチ	サメビタキ
カッコウ	コサメビタキ
ツツドリ	コガラ
ホトトギス	ヒガラ
アオゲラ	ヤマガラ
アカゲラ	シジュウカラ
コゲラ	メジロ
キセキレイ	ホオジロ
ビンズイ	ノジコ
ヒヨドリ	クロジ
モズ	アオジ
コルリ	カワラヒワ
クロツグミ	ウソ
アカハラ	ニュウナイスズメ
ウグイス	カケス
	ハシブトガラス
	合計 39種

◎本の紹介◎

野紫木 洋著「オコジョの不思議」

(どうぶつ社刊 1500円)

上越市 山本 明

野紫木さんは今年の総会時の研修会に講演をしていただいたし、新潟日報には「動物記」を連載されていて、ご存じの方も多いと思われる。標記の著書は数年前に原稿を出されたが、この8月漸く刊行された。

オコジョーこの「手におえない不思議な動物」(著者のあとがき)に魅せられて、野紫木さんは志賀高原の原生林に分け入って7年間観察し調査し続けた。調査区域400haに71カ所の調査ポイントを取って、足しげく通って調べられた。この本はその克明な観察記録をもとに書かれたもの。しかし学術的な固苦しさはなく、素人にも分かるように平易に述べられ、オコジョに関する知見も十分盛られている。

哺乳動物の観察には鳥類以上に探す時間や待つ時間が多く、その努力と忍耐は並大抵ではあるまい。しかし野紫木さんはオコジョばかりでなく、リス・テン・イタチ・タヌキなど他の哺乳動物にも目を向けて個体識別したり、小鳥類とも友だちになったりして、大自然の中に身を投じ時には楽しく観察されていることが窺える。また子供達との観察会の様子、その中で動物好きで観察眼のよい少年のことも述べられている。

巻頭にはオコジョの生態をとらえた美しいカラー写真が16頁28枚載せられているが、できれば説明をつけて欲しかった。

ともあれ、野鳥の観察にも参考になる1冊である。

事務局よりお知らせ！

1. 平成8年 オリジナルカレンダー

毎年好評をいただいているオリジナルカレンダーが販売になりました。県支部でも毎年75部程まとめて注文して、研究会、探鳥会の折に会員の皆さんに販売しています。野鳥紙でもご存知の通り、一般1,100円、会員990円ですが、梱包送料が800円程かかります。翌月の研修会、朝日池探鳥会、12・1月鳥屋野潟の探鳥会の時にお渡しできると思います。希望者が多くなり、足りなくなる事もあります。希望者は事務局へ予約の連絡をお願いします。

2. 県支部20周年記念誌について

県内探鳥案内については、すでにお知らせした通り、約60ヶ所をリスとアップしました。県産目録と共に担当者から執筆依頼があるかと思えます。会員で記念誌をつくる為に是非、ご協力をお願いします。

3. 総会・夜の懇親会のオークション 18,630円になる。

妙高国立少年の家で行なわれた第18回総会野紫木洋氏の講演には大勢の方が集まりま

したが、夜の懇親会も、野紫木先生を囲んで楽しいひとときを過しました。その中で野紫木先生のサイン入りの動物画のオークションが行なわれました。皆さんの御協力で18,630円の収益が上がりました。ありがたく記念誌の資金に使わせていただきます。

4. 野鳥の会、協定旅館に駒の湯山荘

県内の協定旅館として3軒目として、北魚湯の谷村の「駒の湯山荘」が認定されました。越後三山の駒ヶ岳の麓にある山荘です。ちなみに1軒目、妙高オガサキロッジ(0255-86-2261)2軒目、新潟市ホテル湖畔(025-247-3351)です。会員に限り割引などのサービスが受けられます。(会員証を提示して下さい。)

5. 探鳥会リーダー通信の発行

本部の平成7年度事業計画にある「探鳥会リーダーの育成を目的にした情報誌を発行します。探鳥会を担当される方、今後担当されそうな方、希望者などに配布したいと思います。現在支部に20部ほどありますので希望があれば事務局まで連絡を下さい。

事務局 桑原哲哉

発行	1995年10月15日	No.40
発行人	大島 基	編集者 小林成光、千葉 晃、末崎 朗
	日本野鳥の会新潟県支部	
事務局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎025-229-2018 本間由紀子方	<振替>新潟1-6002